

## 自然体験活動の指導で求められる教師の資質能力に関する一考察（Ⅱ） － 1 学期と 2 学期における子どもの活動の成果との関連に注目して－

### A Study on Teachers' Qualities and Competencies for Instructing Students' Camp Activities in Natural Settings (Ⅱ): Comparing with Outcomes of Students' Activities in the 1st Term and in the 2nd Term

別 惣 淳 二\*    千 駄 忠 至\*\*    嶋 崎 博 嗣\*  
BESSO Junji    SENDA Tadashi    SHIMAZAKI Hirotsugu

本研究では、兵庫県公立小学校で実施されている「自然学校」の一つの活動プログラム終了後に担任教師と子どもを対象に質問紙調査を行い、「自然学校」を1学期に実施した場合と2学期に実施した場合に注目して、子どもの活動の成果が、その活動を指導した教師の7つの資質能力とどのような対応関係にあるのかを明らかにすることを目的とした。質問紙調査は、19の小学校による20事例を対象に行い、30名の担任教師と1,272名の子どもから回答を得た。結果として、1学期と2学期の差異に注目すると、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間に対応関係は認められなかった。しかし、1学期に実施した場合と2学期に実施した場合にデータを分けて、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間の対応関係を分析した結果、2学期に実施した場合に、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間に正の対応関係があることを明らかにした。

The purpose of this study is to clarify the relationship between teachers' qualities/competencies and outcome of students' activities in "Nature School", an outdoor education program for public elementary schools by Hyogo Prefecture Board of Education. The researchers compared post-program surveys for classroom teachers and their students who participated in Nature School in the 1st term and in the 2nd term. 30 teachers and 1,272 students in 20 programs conducted by 19 elementary schools participated in this study. As a result, there is no significant correlation between outcomes of students' activities and 7 items of teachers' qualities/competences when compared the 1st term group and 2nd term group. However, dividing the data between programs in the 1st term and ones in the 2nd term, and comparing relationship between the student data and teachers' data in each program, the results of the programs in the 2nd term hold the positive correlation between outcomes of students' activities and teachers' qualities/competences.

キーワード：自然体験活動, 教師の資質能力, 自然学校, 質問紙調査

Key words: Students' Camp Activities in Natural Settings, Teachers' Qualities and Competencies, Nature School, survey

#### I 研究の目的

学校教育における自然体験活動の重要性は、平成14年度から完全実施された新学習指導要領において指摘されており、特に道徳、特別活動、総合的な学習の時間での積極的な導入・実施が求められている<sup>1)</sup>。また、このことに関連して、学校教育法第18条第2項では、「小学校、中学校、高等学校等において、社会奉仕体験活動、自然体験活動等の体験活動の充実に努めるものとする」と規定されている。これらの背景には、現代の子どもたちを取り巻く社会環境や生活環境の変化が、子どもを生活体験や自然体験の不足へと誘い、そのことが原因となって結果的に様々な教育問題、社会問題を引き起こしている

という現状認識がある<sup>2)</sup>。

しかし、生活体験や自然体験が不足しているのは子どもたちだけではない。子どもを指導する立場にある教師自身に生活体験や自然体験が不足していると指摘する教育関係者も少なくない<sup>3)</sup>。したがって、今後、教師の専門性や指導力の向上という観点から、教師の養成・研修において自然体験活動や野外活動等を経験する機会を拡充するとともに、子どもの自然体験活動や野外活動等の指導に必要な資質能力を教師に身につけさせることは重要な課題である。

そこで、これまで行われてきた自然体験活動の研究を概観すると、自然体験活動による子どもの教育的成果に

\* 兵庫教育大学（基礎教育学系）    \*\* 兵庫教育大学（体育・芸術教育学系）

平成19年4月20日受理

関する研究が多く、子どもの自然体験活動を指導する教師あるいは指導者の力量形成に着目した研究はほとんどない<sup>4)</sup>。つまり、現時点では、自然体験活動による子どもの成果が、その指導に携わる教師のどのような資質能力の発揮によって得られているのかは明らかになっていないということである。

筆者らは、このことを解明するために、まず平成13年度に、兵庫県内の「自然学校」受入施設指導者を対象に「今後学校教員が自然体験活動や野外活動の指導に関わっていくことになれば、どのような資質能力が求められるのか」を質問紙法を用いて調査し、因子分析の結果から7つの資質能力を抽出した<sup>5)</sup>。

しかし、この研究結果のみに依拠することは、「自然学校」受入施設指導者の意識のみに偏った「教師に求められる資質能力」になる危険性がある。そこで、より客観的な成果を得るために、平成14年度に「自然学校」への引率指導経験のある兵庫県内の小学校教師にも同様の質問紙調査を実施し、その因子分析結果を「自然学校」受入施設指導者の場合と比較・検討した。その結果、小学校教師よりも「自然学校」受入施設指導者の因子分析結果の方が「自然体験活動の指導で求められる教師の資質能力」をより適切に捉えていると判断した<sup>6)</sup>。

ところが、実際の子どもの「自然学校」における活動の成果に、教師の7つの資質能力がどの程度関連しているのかは明らかになっていない。その際、「自然学校」が教育課程上特別活動として位置づけられていることもあり、「自然学校」を1学期に実施する場合と2学期に実施する場合とでは、時間的経過に伴い子どもの活動の成果も異なってくると考えられる。例えば、進級後間もない「1学期」に比べて、約半年間の学校生活を共有してきた「2学期」の方が、教師－児童間、児童－児童間の対人関係は安定し、集団凝集性も高まる方向へと変化することが一般的と考えられる。そのため、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との関連を捉えていく場合に、1学期と2学期の違いに注目しながら分析する必要があるだろう。

そこで本研究では、兵庫県全公立小学校が5年生に実施している「自然学校」について、1学期に実施している場合と2学期に実施している場合に注目し、ある活動プログラムに参加した子どもたちの成果が、その活動を指導した教師の7つの資質能力とどのような対応関係にあるのかを明らかにすることを目的とした。

## II 研究の内容及び方法

### 1. 調査対象

兵庫県公立小学校19校20事例の担任教師30名（男性19名、女性11名）と子ども1,272名（男子658名、女子614名）。

### 2. 調査期間

平成15年11月～12月、平成16年4月～9月。

### 3. 調査方法

調査には質問紙法を用いた。当該校の担任教師が中心となって指導する、ある一つの活動プログラムを観察（VTR録画を含む）した後に、活動に参加した子ども全員と担任教師に集合場所で一括して質問紙調査を行った。なお、観察した活動プログラムの内訳は、野外炊事9件、クラフト制作4件、焼き板作り3件、基地作り3件、キャンプファイアー1件であった。

### 4. 調査内容

#### (1) 子ども調査の内容

子ども調査では、自然学校の参加に伴う「学び・気づき」と「楽しさ」という2つの観点から自己評価を求めするため、20項目の質問を用意した。具体的には、自然学校の参加に伴う「学び・気づき」の観点を自己評価するために、網野<sup>7)</sup>の作成した「自然体験で培われた態度・行動測定尺度（5因子構造：「学習の基本的態度」「自己に対する理解」「協力」「学習の仕方」「課題の達成」）の中から、因子内容に強く反映し、かつ、因子負荷量の高い7項目を抽出した。一方、「楽しさ」の観点を自己評価するために、荒木<sup>8)</sup>の作成した「自然学校の楽しさ尺度（2因子構成：「親和・達成」「自然理解・快活」）の13項目を用いた。

合計20の質問項目は「自然体験で培われた能力・態度尺度」と「自然学校の楽しさ体験尺度」で構成し、そのうち前者の尺度は、4件法（1.いつもできなかった、2.できなかったことが多かった、3.できたことが多かった、4.いつもできた）を用いた。また、後者の尺度も4件法（1.ぜんぜん楽しくなかった、2.どちらかといえば楽しくなかった、3.どちらかといえば楽しかった、4.たいへん楽しかった）を用いた。

#### (2) 教師調査の内容

教師調査では、別惣・千駄・長澤<sup>9)</sup>が明らかにした「教師に求められる7つの資質能力」（7因子構造：「共通理解と集団指導力」、「安全管理・安全指導の能力・知識」、「自然体験活動の知識」、「企画・指導技術」、「状況予測力と対人関係能力」、「関心・意欲」、「元気・体力」）を反映するように、因子ごとに因子負荷量が大きく、その因子の内容を適切に反映している20項目を抽出し、質問項目とした。各項目の尺度は、5件法（1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.どちらともいえない、4.少しそう思う、5.そう思う）を用いた。

### 5. 分析の手順

子ども調査及び教師調査ともに、1学期と2学期の事例ごとに各項目を加算集計し、因子平均値を算出した。

次に、1学期と2学期の事例ごとに、教師調査の各因子及び全体の平均値を算出し、それを基準値にして「高

得点群」と「低得点群」に分類した。その際、複数の担任教師が指導に当たっていた場合は、一事例間で平均値を求めて処理した。その分類した「高得点群」と「低得点群」の子どもの平均値を算出し、双方の値を比較した。このようにして、「高得点群」と「低得点群」の間で子どもの活動の成果に差が認められれば、子どもの活動の成果と教師の資質能力との間に何らかの対応関係があると判断できると考えた。

なお、統計解析にはSPSS Ver.10.1を用いた。

### Ⅲ 研究の結果及び考察

#### 1. 子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力に関する全体的傾向

##### (1) 1学期と2学期における子どもの活動の成果

表1は、1学期に自然学校を実施した事例と2学期に自然学校を実施した事例における子どもの活動の成果を各因子平均値で示したものである。

「(1)自然体験活動で培われた能力・態度尺度」では、第5因子「課題の達成」において5%水準で有意差が認められ、1学期よりも2学期の方が子どもたちの成果は高かった。

また、「(2)自然学校の楽しさ体験尺度」では、第1因子「親和・達成」において5%水準で有意差が認められ、2学期よりも1学期の方が子どもたちの成果は高かった。

これらの結果から、2学期の方が課題達成感が強く、1学期の方が活動の楽しさの中に親和・達成感を抱く子どもが多いといった差異も見られるが、総じて子どもの活動の成果に関して1学期と2学期の間に大きな偏りはなかった。

##### (2) 1学期と2学期における教師の7つの資質能力

表2は、1学期に自然学校を実施した事例と2学期に自然学校を実施した事例の担任教師が回答した7つの資質能力を各因子平均値で示したものである。

表2の平均値を概観すると、全体的に1学期の方が2学期よりも平均値が高い。特に、第2因子「安全管理・安全指導の能力・知識」では5%水準で、また第3因子「自然体験活動の知識」では1%水準で有意差が認められた。

これらの結果は、2学期よりも1学期の担任教師の方が7つの資質能力について高く自己評価していることを表している。

以上のように、子どもの活動の成果及び教師の7つの資質能力の分析結果から、1学期と2学期の差異に注目した場合、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力には関連が認められないと判断した。なぜ子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力が関連し合っていないのだろうか。次では、その点をさらに詳しく分析するために、1学期の実施事例と2学期の実施事例に分けて、子

どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との対応関係を検討した。

#### 2. 学期別に見た子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との関係

##### (1) 1学期の場合

表3には、1学期に自然学校を実施した学校（事例）に限定して、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力がどの程度対応関係にあるのかを検討するために、子どもの活動の成果を教師の「高得点群」と「低得点群」に分けて平均値で示したものである。

表3の結果によれば、高得点群よりも低得点群の方が平均値は高く、統計的にも有意な因子が多い。つまり、低得点群の方が有意であったものは11あり、逆に高得点群の方が有意であったものは、第3因子「自然体験活動の知識」での「協力」と、第4因子「企画・指導技術」での「課題の達成」、そして第6因子「元気・体力」での「課題の達成」の3つのみであった。

また、7つの資質能力を合計した「全体」の値を見ても、高得点群よりも低得点群の方が平均値は大きかった。

つまり、1学期の場合、教師の資質能力と子どもの成果との間に大きな意識のズレがあり、双方の回答はほとんど正の対応関係にないことを表している。

##### (2) 2学期の場合

2学期についても同様に、「高得点群」と「低得点群」に分けて子どもの活動の成果の平均値を算出した結果が表4である。

第6因子「関心・意欲」と第7因子「元気・体力」を除くすべての資質能力の平均値は、低得点群よりも高得点群の方が高く、多くの子どもの活動の成果に有意差が認められた。つまり、2学期の結果は1学期の結果とは対照的に、教師が自己評価した7つの資質能力と子どもの活動の成果との間に正の対応関係が認められた。なかでも、その結果は第3因子「自然体験活動の知識」と第4因子「企画・指導技術」においてより顕著であり、それ以外の第1因子「共通理解と集団指導力」や第2因子「安全管理・安全指導」や第5因子「状況予測力と対人関係能力」においても対応関係が認められた。

さらに、7つの資質能力を合計した「全体」においても、全て高得点群の方が低得点群よりも値が高く、統計的にも有意な結果が得られた。この結果は、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力が正の対応関係にあることを裏付けるものとして注目に値する。

しかしながら、第6因子「関心・意欲」と第7因子「元気・体力」については、低得点群よりも高得点群の方が低い値を示した。この点については担任教師の指導の様子を観察すると、自然体験活動の指導において、この2つの因子の重要性を十分に認識しているが故に、担任教師の準備や指示が活動の細部にわたって過剰になり、

表1 子どもの自然体験活動の成果と因子平均値

子どもアンケート項目	1学期 平均値 M (SD) N	2学期 平均値 M (SD) N	t 検 定
(1) 自然体験で培われた能力・態度尺度			
第1因子: 学習の基本的態度	3.0 (.60) 778	2.9 (.65) 494	n.s.
1)それぞれの活動にあった準備が自分からできた			
2)自分が活動をする場所の安全に気をくばることができた			
第2因子: 学習の仕方	2.5 (.94) 765	2.5 (.94) 485	n.s.
3)活動をする時、前から自分の知っていたことや調べたことを使った			
第3因子: 自己に対する理解	2.9 (.69) 779	2.9 (.67) 492	n.s.
4)自分のできないところがどこかわかった			
5)自分にあつためあてを自分の判断で決めることができた			
第4因子: 協力	3.0 (.87) 771	3.1 (.85) 492	n.s.
6)だれとでも協力ができた			
第5因子: 課題の達成	2.9 (.88) 775	3.0 (.88) 493	*
7)自分の力でめあてを達成できた			
(2) 自然学校の楽しさ体験尺度			
第1因子: 親和・達成	3.3 (.50) 770	3.2 (.55) 491	*
3)進んで活動しようという気持ちになった時があった			
5)思い通りできた時があった			
6)友だちと一緒に活動する中で友だちの心が分かった時があった			
7)誰とでも気持ちよく活動できた時があった			
9)自分の役割を果たした時があった			
10)今までにしたことのない活動をした時があった			
11)友だちに教えてあげた時があった			
12)友だちの良さを見つけた時があった			
13)友だちにほめられた時があった			
第2因子: 自然理解・快活	3.2 (.54) 763	3.2 (.56) 489	n.s.
1)約束事を守って活動した時があった			
2)気持ちを引き締めてきびきび活動した時があった			
4)自然の良さやすばらしさを感じた時があった			
8)今行った活動は生きていくのに大切だと感じた時があった			

(注)「自然体験で培われた能力・態度尺度」の各因子平均値は、構成項目について4件法(1.いつもできなかった、2.出来なかったが多かった、3.できたが多かった、4.いつもできた)で回答を求め、その平均値を算出したものである。また、「自然学校の楽しさ体験尺度」の各因子平均値は、構成項目について体験者のみ4件法(1.ぜんぜん楽しくなかった、2.どちらかといえば楽しくなかった、3.どちらかといえば楽しかった、4.たいへん楽しかった)で回答を求め、その平均値を算出した。t検定の結果は、\* $p<.05$ 、\*\* $p<.01$ 、\*\*\* $p<.001$ を表す。



表2 「教師に求められる7つの資質能力」と因子平均値

教員アンケート項目	1学期 平均値 (N=20) M (SD)	2学期 平均値 (N=10) M (SD)	t 検 定
第1因子: 共通理解と集団指導力	3.9 (.52)	3.7(.45)	n.s.
1)私は、参加する子どもたちをまとめることができた			
2)私は、子どもに生活習慣・社会的ルールを指導することができた			
3)私は、子どもの自然体験活動に対する意義と価値を理解している			
4)私は、子どもたちに自主的に行動できるように促すことができた			
第2因子: 安全管理・安全指導の能力・知識	3.8 (.60)	3.3(.63)	*
5)私は、事故への応急処置に関する知識を持っている			
6)私は、自分の健康管理ができています			
7)私は、子どもへの安全指導をすることができた			
第3因子: 自然体験活動の知識	3.6 (.80)	2.7(.80)	**
8)私は、動植物・森林等の自然に関する知識を持っている			
9)私は、自然体験活動を実施する場(海・山)の知識をもっている			
10)私は、子どもの自然観察・自然理解を指導する技術をもっている			
第4因子: 企画・指導技術	3.7 (.52)	3.5(.41)	n.s.
11)私は、子どもたちに合うように事前に工夫したプログラムを提供できた			
12)私は、子どもにレクリエーションやゲーム等を指導する技術をもっている			
第5因子: 状況予測力と対人関係能力	3.8 (.56)	3.5(.42)	n.s.
13)私は、活動に参加してもらう人々との対人関係づくりができた			
14)私は、参加する子どもたち相互の人間関係づくりを支援することができた			
15)私は、プログラムの企画段階で状況の変化を予測することができた			
第6因子: 関心・意欲	4.1 (.68)	4.0(.48)	n.s.
16)私は、自然に関する興味・関心をもっている			
17)私は、自然体験活動への情熱をもっている			
18)私は、自然体験活動を自ら楽しむことができた			
第7因子: 元気・体力	3.8 (.80)	3.7(.75)	n.s.
19)私は、体力に自信がある			
20)私は、活力がある			

(注) 因子平均値は、構成項目の5段階評価(1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.どちらともいえない、

4.少しそう思う、5.そう思う)による回答から算出したものである。t検定の結果は、\* $p<.05$ 、\*\* $p<.01$ 、\*\*\* $p<.001$ を表す。

表3 1学期に自然学校を実施した場合の「教師に求められる7つの資質能力」と子どもの成果の関係

教師に求められる資質能力		「共通理解と集団指導力」			「安全管理・安全指導」			「自然体験活動の知識」			「企画・指導技術」		
		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定	高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定	高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定	高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定
子どもの成果		(1)自然体験で培われた能力・態度尺度											
		「学習の基本的態度」											
		「学習の仕方」											
		「自己に対する理解」											
		「協力」											
教師に求められる資質能力		(2)自然学校の楽しさ体験尺度											
		「親和・達成」											
		「自然理解・快活」											
		「状況予測力と対人関係能力」											
		「元氣・体力」											
子どもの成果		(1)自然体験で培われた能力・態度尺度											
		「学習の基本的態度」											
		「学習の仕方」											
		「自己に対する理解」											
		「協力」											
教師に求められる資質能力		(2)自然学校の楽しさ体験尺度											
		「親和・達成」											
		「自然理解・快活」											
		「状況予測力と対人関係能力」											
		「元氣・体力」											

(注)「自然体験で培われた能力・態度尺度」の各因子平均値は、構成項目について4件法(1:いつもできなかった、2:できなかつたことが多かった、3:できた、4:いつもできた)で回答を求め、その平均値を算出したものである。また、「自然学校の楽しさ体験尺度」の各因子平均値は、構成項目について体験者のみ4件法(1:ぜんぜん楽しくなかつた、2:どちらかといえば楽しくなかつた、3:どちらかといえば楽しかった、4:たいへん楽しかった)で回答を求め、その平均値を算出したものである。t検定の結果は、\*p<0.05、\*\*p<0.01、\*\*\*p<0.001を表す。

表4 2学期に自然学校を実施した場合の「教師に求められる7つの資質能力」と子どもの成果の関係

子どもの成果	「共通理解と集団指導力」				「安全管理・安全指導」				「自然体験活動の知識」				「企画・指導技術」			
	高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定	
(1)自然体験で培われた能力・態度尺度	「学習の基本的態度」	3.0(.64)251	2.9(.65)243	**	3.0(.69)195	2.9(.62)299			3.1(.64)168	2.9(.65)326	**		3.3(.55) 84	2.9(.65)410	***	
	「学習の仕方」	2.5(.90)245	2.4(.97)240		2.5(.97)193	2.4(.92)292			2.7(.92)164	2.3(.93)321	***		2.8(.86) 84	2.4(.94)401	***	
	「自己に対する理解」	3.0(.64)250	2.8(.68)242	***	2.9(.70)194	2.9(.65)298			3.0(.64)167	2.8(.67)325	***		3.1(.59) 84	2.8(.67)408	***	
	「協力」	3.1(.87)249	3.1(.83)243		3.1(.89)195	3.1(.82)297			3.2(.85)167	3.0(.84)325	*		3.3(.82) 84	3.1(.85)408	***	
	「課題の達成」	3.0(.89)250	2.9(.86)243	*	3.0(.88)195	2.9(.88)298			3.1(.87)167	2.9(.87)326	***		3.4(.67) 84	2.9(.90)409	***	
(2)自然学校の楽しさ体験尺度	「親和・達成」	3.2(.53)250	3.2(.57)241		3.3(.60)193	3.2(.51)298	*		3.3(.49)167	3.2(.58)324			3.5(.34) 84	3.2(.57)407	***	
	「自然理解・快活」	3.2(.57)249	3.2(.55)240		3.3(.56)192	3.2(.56)297	**		3.3(.53)167	3.2(.58)322			3.4(.43) 84	3.2(.58)405	***	
	教師に求められる資質能力				「状況予測力と対人関係能力」				「元気・体力」				全体			
	高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定		高得点群 の平均値 M(SD) N	低得点群 の平均値 M(SD) N	t 検 定	
	3.0(.63)255	2.8(.65)239	***		2.8(.66)217	3.1(.62)277	***		2.9(.65)243	3.0(.64)251	**		3.1(.62)190	2.9(.66)304	***	
(1)自然体験で培われた能力・態度尺度	「学習の基本的態度」	2.5(.89)252	2.5(.99)233		2.4(.99)211	2.5(.90)274			2.4(.97)240	2.5(.90)245			2.7(.92)186	2.3(.92)299	***	
	「学習の仕方」	2.9(.63)255	2.8(.70)237		2.9(.71)215	2.9(.63)277			2.8(.68)242	3.0(.64)250	***		3.0(.64)189	2.8(.67)303	**	
	「自己に対する理解」	3.1(.83)254	3.1(.87)238		3.1(.88)216	3.1(.82)276			3.1(.83)243	3.1(.87)249			3.2(.84)189	3.0(.85)303	*	
	「協力」	3.0(.85)255	2.9(.91)238	*	2.9(.93)216	3.0(.83)277	*		2.9(.86)243	3.0(.89)250	*		3.1(.85)189	2.8(.89)304	***	
	「課題の達成」															
(2)自然学校の楽しさ体験尺度	「親和・達成」	3.3(.49)255	3.2(.61)236		3.2(.62)214	3.3(.48)277	*		3.2(.57)241	3.2(.53)250			3.3(.48)189	3.2(.58)302	**	
	「自然理解・快活」	3.2(.53)254	3.2(.60)235		3.2(.60)213	3.2(.53)276			3.2(.55)240	3.2(.57)249			3.3(.53)189	3.2(.58)300	*	

(注)「自然体験で培われた能力・態度尺度」の各因子平均値は、構成項目について4件法(1:いつもできなかった、2:できなかつたことが多かった、3:できたことが多かった、4:いつもできた)で回答を求め、その平均値を算出したものである。「自然学校の楽しさ体験尺度」の各因子平均値は、構成項目について体験者のみ4件法(1:ぜんぜん楽しくなかつた、2:どちらかといえば楽しくなかつた、3:どちらかといえば楽しかった、4:たいへん楽しかった)で回答を求め、その平均値を算出したものである。t検定の結果は、\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001を表す。

子ども以上に活動している場面が散見された。こうした教師自身の意欲的な取り組みが子どもの主体性や創意工夫を減退させてしまったのではないかと推察される。したがって、「関心・意欲」や「元気・体力」といった教師の資質能力は、子どもの活動を支援したり、指導したりする場面では、それらの資質能力をある程度抑制できる自己抑制力が教師には求められると考えられる。

### (3) 学期別に分析した場合の結果に関する考察

以上のように、1学期の実施事例と2学期の実施事例に分けて、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との対応関係を検討した結果、1学期の実施事例の場合は低得点群よりも高得点群の方が平均値が低く、子どもの活動の成果と教員の7つの資質能力とは負の対応関係にあった。ところが、2学期の実施事例の場合は低得点群よりも高得点群の方が平均値が高く、子どもの活動の成果と教員の7つの資質能力とは一部を除いて正の対応関係にあった。

このような結果が得られた原因の一つは、1学期は教師と子どもとの人間関係・信頼関係や子どもたちの学習規律・学習習慣が十分に形成されていなかったり、教師が子ども一人ひとりについての内面理解や学級内の子ども同志の人間関係とその変化を的確に把握できていなかったりするなど、担任教師が学級づくりを行っている最中であることが考えられる。それ故、担任教師が指導し、子どもの活動を観察しても、その成果を含めて適切に評価できていない可能性もある。

竹内は「非日常的な活動としての行事は、日常的な学習活動、文化活動、自治活動を総括するものである。日常的な活動は、非日常的な行事に流れ込み、そこでその成果を集中的に発揮していく。その意味では、非日常的な行事は日常的活動のピークであり、『節』である」<sup>10)</sup>と言及する。つまり、この指摘は、日常の学習状況や学級集団の状態が学校行事における子どもの活動成果となって現れることを示唆している。

この指摘に従えば、2学期になると、学級担任と子どもとの信頼関係や学級集団としての学習規律などが形成され、日頃の学級担任による学級づくりの成果が子どもの自然体験活動やその成果にも反映するようになると推察される。つまり、先の結果は、1学期よりも2学期の方が、担任教師が7つの資質能力を発揮した場合、子どもの活動の成果に結びつきやすい教育的条件が整っていたことによるものと考えられる。

## IV. 結語

本研究では、兵庫県全公立小学校が5年生に実施している「自然学校」について、1学期に実施している場合と2学期に実施している場合に注目し、ある一つの活動プログラムに参加した子どもの成果が、その活動を指導

した教師の資質能力とどのような対応関係にあるのかを明らかにしようとした。

最初に、1学期と2学期に実施した事例をもとに活動プログラムに参加した子どもの成果を分析した結果、1学期も2学期も子どもの活動の成果に大きな差異はなかった。また、教師の7つの資質能力についても1学期と2学期に実施した事例をもとに分析した結果、2学期よりも1学期の方が自己評価の値が高かった。このことから、1学期と2学期の差異に注目すると、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間に対応関係は認められなかった。

そこで、1学期に実施した場合と2学期に実施した場合に分けて、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間の対応関係を分析した結果、以下の点が明らかになった。

1学期に実施した場合は、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間に正の対応関係が見られず、むしろ負の対応関係が多く認められた。それに対して、2学期に実施した場合には、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間に正の対応関係が多く認められた。

つまり、この結果は、①高い資質能力を有する担任教師とそうでない担任教師とでは子どもの活動の成果も異なり、高い資質能力を有する担任教師ほど子どもの活動の成果も高いということ、②そうした傾向は1学期よりも2学期に実施した場合の方が顕著であったということを示している。このことから、2学期に実施した場合において子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との間に正の対応関係があったと結論づけられる。

これは、1学期よりも2学期の方が、担任教師は自然学校での子どもの学びの様子や状況を的確に把握しており、それと照らし合わせながら自身の指導力を適切に自己評価できていたからであると考えられる。つまり、1学期よりも2学期の方が教師が資質能力を発揮するにしても、子どもの活動の成果に結びつきやすい状況にまで各学級の質が高まっていたことを示していると推察される。

しかし、これらの結果を受けて、直ちに自然学校などの自然体験活動は2学期に実施した方が良いと結論づけたいのではない。いつ自然体験活動を実施すべきなのかということは、各学校の特別活動の年間指導目標・指導計画との関係のなかで考えるべきであり、1学期に自然体験活動等の学校行事を実施して、結果的に学期毎の指導目標を達成させていくという考え方があっても構わない。

本研究の成果として言えることは、自然体験活動の指導において教師の7つの資質能力を有効に機能させるならば、1学期よりも2学期に実施した方が、子どもたちの活動の成果という点では大きな期待が持てるというこ



となのである。

最後に、本研究の調査結果の精度を高めるために、以下の点を課題として挙げておきたい。

一つは、本研究で取り扱った調査データは20事例であり、調査結果の精度から言えば十分なデータが集まったとは言えない。特に2学期に自然学校を実施した学校の件数が少なく、さらなる調査データの蓄積が必要である。

二つは、本研究ではこれまでと同様に兵庫県の「自然学校」をフィールドにして調査を実施したが、自然学校では複数の担任教師と指導補助員が指導にあたっており、子どもの成果は必ずしも一人の担任教師の指導によるものではない。したがって、子どもの活動の成果と教師の7つの資質能力との対応関係を分析する上で正確性を欠いた面があったことは否めない。今後この精度を高めていくためには、学校行事としての「自然学校」に留まらず、学校教育の様々な自然体験活動を対象にして調査研究を進めていく必要がある。

#### 付記

本研究は、平成15年度兵庫教育大学プロジェクト研究「子どもの自然体験活動の指導に求められる学校教員の資質能力形成に関する研究」（研究代表者：長澤憲保）として取り組んだ研究成果の一部である。本研究の調査を進めるにあたり、兵庫県立教育研修所、兵庫県立嬉野台生涯教育センター、兵庫県立南但馬自然学校ならびに当該施設を利用される県内各地の小中学校関係者にご理解とご協力を賜った。この場をお借りして厚く御礼を申し上げる次第である。

#### 註

- 1) 文部省（1998）『小学校学習指導要領 総則編』。
- 2) 文部科学省（2003）『平成14年度 文部科学白書 新しい時代の学校～進む初等中等教育改革～』や中央教育審議会（2002）『青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）』では、子ども達の生活体験、社会体験、自然体験等、多くの人や社会、自然と直接触れ合う体験の機会が乏しく、直接経験が不足していると指摘している。また、佐藤、松下、深谷は子どもの自然体験不足の実態を問題視している。（佐藤哲郎（1993）「子どもたちに自然体験がなぜ必要か」、『青少年問題』8月号、12-18頁。松下俱子（1998）「学校教育に生きる豊かな自然体験の在り方を探る」、『中等教育資料』6月号、14-19頁。深谷昌志（1999）「自然体験に乏しい子どもたち」、『レクリエーション』483、日本レクリエーション協会、6-9頁。）
- 3) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）『報告 青少年の野外教育の充実について』の「野外教育指導者の課題」において言及されている。

また、星野は、今の教師はほとんどが野外活動への引率指導だけに終わってしまっており、野外活動の指導もできず、自分自身も野外活動の経験がないという教師が多すぎると指摘している。（星野敏男（1994）「野外活動の指導者養成をめぐる現状と問題点」、『月刊社会教育』5月号、19頁。）

- 4) 子どもの自然体験活動に関する研究では以下のようなものがある。上西一郎・別惣淳二・長澤憲保・千駄忠至他（2004）「日頃の自然体験度と自然学校で得た成果の関係」、『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』4、55-66頁。千駄忠至・赤松幸子（2003）「自然学校で育成される態度とそれに影響を与える要因」、『兵庫教育大学研究紀要』23、59-66頁。谷井淳一・藤原恵美（2001）「小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発」、『野外教育研究』5(1)、日本野外教育学会、39-47頁。蓬田高正・飯田稔・井村 仁・関 智子・岡村泰斗（2000）「長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響」、『野外教育研究』3(2)、日本野外教育学会、13-22頁。今泉紀嘉（1995）「自然体験活動による態度変容について」、『日本特別活動学会紀要』4、68-85頁。飯田稔（1993）「体験学習の意義」、『青少年問題』40(8)、4-11頁。野沢 巖（1989）「埼玉県の都市部と農村部における小学生から大学生までの1年間の自然体験と生活体験（1）」、『埼玉大学紀要教育学部（教育科学Ⅱ）』38(1)、99-116頁。
- 他方、教師を対象にした研究では、以下のような研究に留まる。兵庫県立南但馬自然学校（2001）『平成12年度 研究紀要』。香西 武・日垣正典・森 三鈴・畠山知恵他（2000）「自然体験・社会体験学習実施に対しての小・中学校教員の意識－「総合的な学習の時間」への取り組み意識調査から－」、『野外教育研究』4(1)、日本野外教育学会、51-58頁。
- 5) 別惣淳二・長澤憲保・上西一郎・一山秀樹（2003）「自然体験活動指導に求められる教員の資質能力に関する調査研究」、『学校教育学研究』15、兵庫教育大学学校教育研究センター、1-12頁。
- 6) 別惣淳二・千駄忠至・長澤憲保（2005）「自然体験活動の指導で求められる教師の資質能力に関する一考察」、『日本教科教育学会誌』28(1)、69-78頁。
- 7) 網野一志（1995）『体育科の学力診断尺度作成に関する研究－高学年を対象として－』、兵庫教育大学修士論文。
- 8) 荒木京子（1992）『宿泊型や野外活動における楽しさ尺度作成の試み－小学校5年生を対象にして－』、兵庫教育大学卒業論文。
- 9) 前掲、別惣・千駄・長澤（2005）、76頁。
- 10) 竹内常一（1980）『生活指導と教科外教育』、民衆社、254頁。